

# 成績とキャリア探索行動の関係

辰巳 哲子 リクルートワークス研究所・主任研究員

高校では、「学校における学習と職業との関係についての生徒の理解を促進し、主体的な職業選択の能力につなげる」ことが明示された改訂学習指導要領が段階的にはじまっている。本稿では、学習と働く事との関係の理解について、学業成績と実際のキャリア探索行動との関係に着目した。結果、中学の成績高=>進学校群と成績低=>就職が多い高校との間にはキャリア探索行動の有意な差が見出された。

**キーワード：** キャリア教育, 成績, キャリア探索, career exploration

目次

- I. キャリア教育をめぐる課題
- II. 先行研究
- III. 調査概要・分析方法
- IV. 調査結果
- V. 考察と今後の分析方針

## I. キャリア教育をめぐる課題

高校では、2013年4月から改訂学習指導要領が段階的にスタートする。今回の改訂の大きな特徴の一つは、PISA調査で指摘された、「知識・技能を活用する」ことへの改善が明示されていることだろう。知識・技能の活用への期待は、「総則」をはじめとする随所に記され、たとえば国語科では、「実生活の様々な場面における言語活動を具体的に内容に示す」と、その改訂の主旨が示されている。さらに、教育課程の編成においては、就業体験を通じて、「学校における学習と職業との関係についての生徒の理解を促進し、主体的な職業選択の能力につなげる」ことを要望している（傍点は筆者）。

さて、学校から社会への円滑な移行を目標としたキャリア教育が公文書に初出してから15年が経とうとしている。この間、全国の高校では、就

業体験や社会人講師の講話、適性検査、上級学校や職業調べといった活動が実施されるようになった（国立教育政策研究所, 2013）。そして、教科で得た知識や技能をどのように活用するかという点についても、指定校からのいくつかの実践報告が見られるようになっている。しかし、学習指導要領で示された、学校での学習が主体的な職業選択能力につながっているのかという点については、就業体験などの効果が一部に見られ始めたものの、教科教育との関係については確認されていない。

さらに、高校教員は、キャリア教育の意義を認めているものの、教員自身の負担感を懸念する声は年々高まっている（進学総研, 2012）。他の教科とは違って、教科書も指導案もなく、さらに自身が経験したこともない、キャリア教育に対する教員の負担感はかなり大きいものと推察され、このままの状況が続くと本来の目的を軽視し、就業体験がイベント化するといった可能性も否定できない。こうした状況の中で、教員の大きな専門性の1つである、教科教育を通じた「主体的な職業選択能力」の開発について、その可能性を検討することは急務であると考ええる。

そこで本稿では、教科学習の成果がどのように「主体的な職業選択の能力」につながっているのかという点を明らかにするための最初のステップとして、中学校の成績とその後に進学した高校の

進路傾向が、就職前のキャリア探索行動を分化しているのか、そして、具体的にはどのキャリア探索行動に違いがあるのかについて検討する。

## II. 先行研究

荻谷 (1988) は、教育社会学からのアプローチとして、学校が能力形成機関に留まらず、内部に直接的に社会 (企業) との「実績関係」というパイプラインを形成することで、学業成績による配分がそのまま直接労働市場に結び付けられていることを明らかにしている。しかし、労働市場に入る前の準備行動と成績との関係について、個人の側からみたものは存在しない。本稿では、「主体的な職業選択」に向かうための準備段階の行動について、キャリア探索行動尺度を用いた測定をおこなう。キャリア探索とは、自分自身や仕事、職業、組織について情報を収集し、理解を深めることで、仕事世界への移行やその後の適応プロセスに関わりをもつ意図的行動とされている (Jordaan, 1963; Stumph, Colarelli, & Hartman, 1983; 安達, 2010)。

Super (1957) は職業生活のコースと周期という観点から 5 つのキャリア・ステージを示している。キャリア・ステージは、「成長、探索、確立、維持、下降」の 5 段階であり、本稿で扱うキャリア探索は、15 歳～24 歳と、Erikson のいうところの「青年期」にあたる。この段階におけるキャリア探索は、自分について考え評価する自己探索 (self-exploration) と、仕事世界についての情報を得る環境探索 (environment exploration) そして、他者から学ぶ (learn from others) といった 3 側面から捉えることができる (安達, 2010)。以降の調査においては、安達のキャリア探索行動尺度を用い、学業成績および高校の進路傾向との関係を検討する。

## III. 調査概要・分析方法

調査概要は以下のとおりである。

○対象：高卒で働く 18 歳～29 歳の男女 362 名

○調査期間：2013 年 2 月

○調査項目：①属性 (性別・年齢)、②中学時代の成績、③就職前のキャリア探索行動 ④高校の進路傾向

学業成績については、中学校時代の成績について、「あなたの中学校時代の成績 (学業成績) は、5 段階で評価するとどの段階になりますか?」と教示し、「上のほう」から「下のほう」までの 5 段階で聞いた。さらに、高校の進路傾向については、①進学者のほうが多い ②就職者のほうが多い ③進学と就職が半分ずつ の 3 つの群とした。

そして、「中学校時代の成績が高く、進学者のほうが多い高校に進学した」群と、「中学時代の成績が低く、就職者が多い高校に進学した」群の 2 群について、キャリア探索行動の 3 因子の因子得点の平均値の差を  $t$  検定を用いて比較した。

## IV. 調査結果

第 1 の課題は、中学成績とその後進学した高校の進路タイプによって、就職前のキャリア探索行動に違いがあるかどうかを検討することである。

最初に、安達 (2010) の作成したキャリア探索行動を尋ねた 13 の項目<sup>1</sup>について、主因子法 promax 回転を用い、因子構造を確認したところ、自己探索 (9,10,8,13,12,11) 環境探索 (6,7,4,1) 他者から学ぶ (5,3,2) の 3 因子構造となり、信頼性係数は順に、 $\alpha=.92$ ,  $\alpha=.86$ ,  $\alpha=.75$  であったため、十分な信頼性が得られたと判断し、この 3 因子を用い、以降の分析をおこなった。

まず、中学成績とその後進学した高校の進路タイプに応じて、個人を「中学校時代の成績が高く、進学者が多い高校に進学した」群と「中学時代の成績が低く、就職者が多い高校に進学した」群の 2 群に分類し、キャリア探索行動の 3 因子 (自己探索・他者から学ぶ・環境探索) についてその平均点の 2 群の差を検定した (図表 1)。結果、「自己探索」では、0.34 の差が生じており、 $t$  検定の結果、1%水準の有意差が認められた。また、「他

者から学ぶ」では、0.27の差が生じており、検定の結果からは、5%水準の有意差が認められた。さらに「環境探索」については、0.32の差が生じており、検定結果からは1%水準の有意差が認められた。いずれも「中学の成績が高く、進学者の多い高校に進学した者」が高い値であり、「中学時代の成績が低く、就職者が多い高校に進学した者」に比して、キャリア探索行動が活発であることが示唆される結果となった。

**図表1 キャリア探索行動の3因子における平均値の群別比較**

	中学成績と高校タイプ		差	t値
	中成績(高) ・進学(n =141)	中成績(低) ・就職 (n=84)		
自己探索	3.59	3.25	.34	3.02 **
SD	0.77	0.93		
他者から学ぶ	2.95	2.68	.27	2.22 *
SD	0.92	0.85		
環境探索	3.63	3.31	.32	2.85 **
SD	0.78	0.88		

\*\* $p < .05$ , \* $p < .01$

次に、質問項目レベルにおいて検討する。図表2は、分類した2群について、各質問項目の平均点を比較したものである。

**図表2 キャリア探索行動の項目別平均値の群別比較**

因子	NO	キャリア探索行動	進学校・ 中学成績 高い(A)	就職校・ 中学成績 低い(B)	A-B
自己探索	8	自分の長所や短所について考えてみる	3.76	3.25	0.51
	9	自分という人間について考えてみる	3.75	3.19	0.56
	10	これまでの自分の生き方について振り返ってみる	3.61	3.20	0.41
	11	これからの自分の生き方について想像してみる	3.71	3.28	0.43
	12	自分が好きなこと、得意なことについて考えてみる	3.82	3.47	0.35
13	自分が嫌いなこと、不得意なことについて考えてみる	3.71	3.36	0.35	
他者から学ぶ	2	将来の仕事について友人や先輩、家族などから話を聴く	3.43	2.84	0.59
	3	仕事や働くことについての番組を観たり、講演会を聴きに行く	2.86	2.53	0.33
	5	社会人から仕事や働くことについて話を聴く	3.17	2.93	0.24
環境探索	1	本や雑誌、ネットなどで仕事に関連する記事を読む	3.64	3.27	0.37
	4	興味がある仕事に関する情報を集める	3.76	3.50	0.26
	6	興味がある仕事に就くための方法を調べる	3.63	3.39	0.24
	7	興味がある仕事に必要な知識や資格について調べる	3.72	3.44	0.28

注: 数字は各群における項目の平均点。□線は、平均点の差が0.5以上の項目

図表2からは、A群のほうが、B群に比べて、すべての項目において平均点が高いことが明らかになった。A群の上位項目(平均3.75以上)を確認すると、「自分の長所や短所について考えてみる」「自分という人間について考えてみる」「自分が好きなこと、得意なことについて考えてみる」「興味がある仕事に関する情報を集める」であった。

次に2群の平均値の差が大きいもの(0.5以上)に目を向けると、図表中に示したように、「自分の長所や短所について考えてみる」「自分という人間について考えてみる」「将来の仕事について友人や先輩、家族などから話を聴く」が確認された。

## V. 考察と今後の分析方針

本稿の目的は、教科学習がどのように「主体的な職業選択の能力」につながっているのかという点を明らかにするための最初のステップとして、中学校での成績と高校の進路傾向とを組み合わせ、キャリア探索行動との関係を検討することであった。

分析結果からは、学業成績とキャリア探索行動には関係があることが示唆された。高卒就職者の就職前のキャリア探索行動は、中学成績と高校の進路タイプによる有意な差が確認された。「中学成績が高く、進学者の多い高校に通った者」は、「中学成績が低く、就職者の多い高校に通った者」に比して、就職前のキャリア探索行動が活発であった。具体的には、自己探索因子を構成している、「自分の長所や短所について考えてみる」「自分という人間について考えてみる」「自分たちが好きなこと、得意なことについて考えてみる」、そして「他者から学ぶ」因子を構成している、「興味がある仕事に関する情報を集める」について、他の項目に比して平均値の差が大きいことが示された。

最後にこれらの結果をもとに、高校現場でキャリア教育を推進する際の実践的な課題の視点から論考を進めよう。直近に国立教育政策研究所から発行された調査データでは、各高校において、キ

キャリア教育として多様な学習機会がもうけられてきていることがわかる。キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査（国立教育政策研究所，2013）によると，自分を理解する教育（キャリアカウンセリング・諸検査を含む），生徒のキャリア発達を意識したホームルーム活動を用いた授業や総合的な学習の時間の授業，将来設計に関する学習，大学・専修学校など上級学校への訪問や見学・体験入学・学校説明会，事業所における体験学習（職場見学・就業体験・ボランティア活動を含む）などが，高校でのキャリア教育として実施されている。そして，「生徒のキャリア発達を意識した各教科の授業」についても，「実施している」と回答する高校は70%を超えている。しかし，詳細な内容はわかっておらず，こうした多様な活動のそれぞれがどういった進路タイプの学校群において実施されているのかも未知のままである。

本稿の調査結果からは，自分の得意・不得手な分野を言語化したり，自分自身について考えてみるといった，「自分を理解する教育」は，中学校時代の成績が低く，就職する者のほうが多い学校に進んだものに対しては，実施されていないか，もしくは実施されていたとしても，生徒自身の学びにはつながっていないようである。上述の国研の調査で示されたように，キャリア発達支援を意識した教科授業への取り組みに目が向けられてきているならば，こうした自己理解につながる教育活動は，適性検査といった形式化されたものばかりを用いるのではなく，例えば国語科や総合的な学習の時間などを使って実施されているディスカッションなどを用いた教育活動でも実施可能ではないかと推察される。

本調査の結果が示していることは，学習成果としての成績とキャリア探索行動との関係であり，成績差のある2群において，その差の所在を探索的に確認したが，これらの差を解消する手段はこれまでの学校教育の中でも実践されてきた教科教育を中心とした学校での学びの中にあると考えている。教科教育については，学習手段の選択や計画の立案は学校および教員個人の裁量に委ねられ

ている。生徒の実態を把握した上で，教員らが，自己の専門分野を活かして個人で計画を立てることができる，教科の中でのキャリア支援の実施に今後期待したい。

最後に分析の限界と今後の展開を述べておく。今回の分析では，中学での成績と入学した高校の進路タイプとがその後のキャリア探索行動を分化しているという一定の成果が得られたものの，紙幅の限界もあり，なぜ中学の成績と高校の進路タイプとがその後のキャリア探索行動を規定するのかという点には深く踏み込むことはできていない。これを明らかにするためには，成績に至るプロセス，すなわち，教科教育の中で生徒が何を学んでいるかという点についての詳細な分析が必要であると考えられる。生徒は教科教育を通じて知識や技能以外にも多様な事柄を学んでいる。生徒が教科の学習を通じて，知識とともに何を学んでいるのか—この点を可視化することこそが，高校教員のキャリア教育に対する動機づけになる可能性があり，高校で求められている「学校における学習と職業との関係についての生徒の理解を促進し，主体的な職業選択の能力につなげる」ことにつながると考える。これらの課題については，稿を改め，分析・検討を続けたい。

## 注

1 安達（2010）が示したキャリア探索尺度は以下の通りである。安達は尺度作成にあたり，大学生を対象に実施した結果を示しているが，本稿では高卒社会人を対象とした回想法調査であることを考慮し，因子構造を確認した。図表2に示したように分析には，安達によって作成された以下の13問の質問項目すべてを使用している。

- 1 本や雑誌、ネットなどで仕事に関連する記事を読む
- 2 将来の仕事について友人や先輩、家族などから話を聴く
- 3 仕事や働くことについての番組を観たり、講演会を聴きに行く
- 4 興味がある仕事に関する情報を集める
- 5 社会人から仕事や働くことについて話を聴く
- 6 興味がある仕事に就くための方法を調べる
- 7 興味がある仕事に必要な知識や資格について調べる
- 8 自分の長所や短所について考えてみる
- 9 自分という人間について考えてみる
- 10 これまでの自分の生き方について振り返ってみる
- 11 これからの自分の生き方について想像してみる
- 12 自分が好きなこと、得意なことについて考えてみる
- 13 自分が嫌いなこと、不得意なことについて考えてみる